

「家族」を問う

ネットワークとしての現代家族

山根 真理
Written by
Mari Yamane

愛知教育大学教授

■ 家族は集団か？

「ネットワーク」として家族をとらえる見かたは、奇妙に思えるかもしれない。「家族」は集団ではないのか？ 家族がネットワークである、とは一体どういうことなのか、と。家族研究の領域では、家族を集団としてとらえる見かたは、長らく一般的であった。たとえば森岡清美の「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かかわりあい」で結ばれた、幸福 (well-being) 追求の集団である」(森岡、1997) という家族定義は、定評あるテキストの中で1983年に示されて以来、長らく家族研究のスタンダードであり続けてきた。「社会集団」の基本

要件は、有斐閣の『新社会学事典』(1993年)によれば、①継続的な相互作用 ②共同の集団目標の設定と協働 ③規範の制定による成員規制 ④地位と役割の配分 ⑤一体的なわれわれ感情に基づく成員連帯である。「家族」は、このような意味で「集団」として捉えられてきたわけだが、人類学の記録に目を転じると、人びとが近い人との社会関係を、「集団」のような形で営んではいない社会は珍しくはない。

坪内・前田らによる「マレー社会」の研究によると、マレーの人びとの家族概念は、そのメンバーシップ、範囲ともに明確ではなく、重層的である。マレー語で「家族」の意味で最もよく用いられるのは「クルアルガ」という語であるが、この語の指す範囲はいま

いで、広く親族を含めて用いられることが多い。一つの家屋に同居するのは一組の夫婦(とその子)を基本とするが、必要に応じて近隣に居住する親子、きょうだいなどの親族がメンバーに加わったり離れたりする。「家族」の認識も居住の単位も、明確な輪郭をもたない。このような社会では家族は「集団」というよりは個人を中心とした二者関係の累積―「家族圏」として把握される。(坪内・前田、1977)

坪内らはさらにこの見かたを一般化し、「家族」そのものを「家族圏」として捉えることを提案する。もともと境界のあいまいなネットワークがあつて、そこから何らかの生活集団を明確にしようとする力が働いたとき、家族は集団性を強める、とみるのである。



日本の「家」や、高度経済成長期に大衆化した「近代家族」（私的領域の情緒結合を重視した性別役割分業家族）は、ネットワークから「集団」を取り出す力が強く働いた家族、とみることができよう。

集団からネットワークへ

近年、家族を集団ではなく「ネットワーク」として捉える見かたが提案されるようになってきた。1998年に、戦後の集団論的家族研究をリードし続けてきた森岡によって、「高密度ネットワークとしての家族」という捉えかたが提案されたのは象徴的である。ここでは、家族関係は、他のサポート・ネットワークとの関連で捉えられる。落合はさらに、家族を「個人のネットワーク」と捉え、「社会の基礎単位としての個人」がさまざまな他者との間に切り結ぶつながりのひとつとして「家族」を捉える見かたを提案する。

このような見かたの転換が起こった背景には、1970年代中葉以降、離婚・再婚の増加、一人親世帯や単身世帯の増加、晩婚化・非婚化、出生率の低下、性別役割分業への問い直しなど、アメリカ、ヨーロッパの多くの地域と共通する「家族の現代的変容」が日本においても進行した、ということがある。子育てや生計維持といった一定の目標をもち、

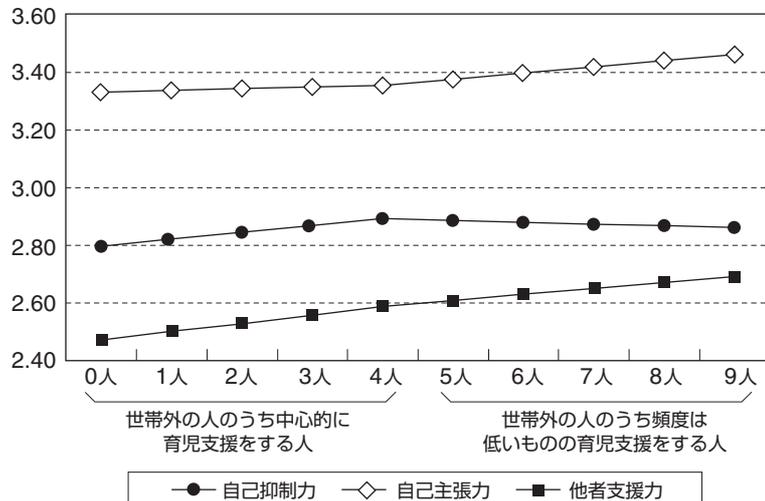
メンバーがその目標のために役割分業をすような「家族」が「標準」としての位置を失うに従って、「ネットワークとしての家族」という捉え方に光があたってきた、とみることができらるだろう。

現代の子育て ネットワークと「家族」

では、現代人のネットワークと「家族」はどのような関係にあるのだろうか？ 最後にこの問題を、子育てをめぐるネットワークに関する近年の研究成果をおおして考えよう。

子育ての研究のなかに「ネットワーク」の視点を取り入れられるようになったのは、1980年代のことである。それ以前は、集団論的役割分業論の見かたが優勢であり、「母親の子育て態度と子どもの発達」という枠組みが強かったため、「家族あるいは個人を支えるネットワーク」という視点はもたれにくかった。子育て研究にネットワークの視点導入されるなかで、現代の子育ては家族以外の人の輪に囲まれて成立していること、母親の育児不安を軽減するには育児を支えるネットワークが有効であること、逆にネットワークが乏しい状況では育児不安など危機的な状況が生じる危険があること、などが明らかにされてきた。

【図1】子育てを支える世帯外の人々の数別にみた 子どもの自己抑制力、自己主張力、他者支援力（関東調査）
（出所：松田茂樹他「揺らぐ子育て基盤」勁草書房、2010、p.105）



育児ネットワークの研究を精力的にすすめてきた松田茂樹らが2000年代に関東、首都圏、愛知県において子育て期の親を対象に行ってきた一連の調査は、現代の子育てとネットワークの関係について、興味深い結果を示している。松田の育児ネットワーク分析から得られた結果は、次のようなものである。まず、世話ネットワーク、相談

ネットワークの2つの観点でみたとき、現代の多くの家庭が親族、非親族に助けられながら子育てをしている。しかし、相談ネットワークに比べると世話ネットワークの方が脆弱であり、1割強の家庭は、世話ネットワークが全くない。この育児ネットワークは、母親の子育ての悩みや育児不安軽減だけでなく、子どもの精神発達を支えることにつながっている。

これらの結果のなかで特に興味深いのは、子どもを中心にいて育児ネットワークを捉える視点が示され、子ども自身にとってのネットワークの効用が指摘されていることである(図1)。この指摘は、品田による「保育所と習い事が子どもの発達に効果をもたらす」という知見とも響き合う。これらの知見は、集団論的子育て観からすれば、ショッピングなものである。「親(母)が熱心に

子育て役割を果たす」ことが子どもの発達に効果をもたらす、という通念とは逆に、親以外の人の輪に囲まれる機会をもつことのほうが、子どもの発達に効果をもつことが示されているのである。

「ネットワークとしての現代家族」という見かたによって、家族に対して、より柔軟な捉えかたが可能になる。人は必ずしも家族のなかで生まれ、育ち、大人になって家族を形成し、家族に見送られて死んでいく、とは限らない。人の人生のなかで出会うさまざまな人の輪のなかで「家族」が占めるウェイトの最適バランスは、ライフステージ、世帯構成、当人のニーズや価値観などによって、多様な可能性がある。「ネットワークとしての現代家族」という見かたによって、このような視点が拓かれるのである。

CEL

■参考文献

- 落合恵美子「新しいパラダイムの課題」〔家族社会学研究〕第10巻1号 1998年
 品田知美「親の育てかたと子どもの育ち」(松田茂樹他「揺らぐ子育て基盤」勁草書房 2010年)
 坪内良博・前田成文「核家族論再考」弘文堂(1997年)
 松田茂樹「子育てを支える社会関係資本」(松田茂樹他「揺らぐ子育て基盤」勁草書房 2010年)
 森岡清美「新しい家族社会学 四訂版」培風館(1997年)
 森岡清美「家族社会学のパラダイム転換をめざして」〔家族社会学研究〕第10巻1号 1998年
 吉田あけみ・杉井潤子・山根真理編「ネットワークとしての家族 ミネルヴァ書房(2005年)

● ● ●
 山根 真理(やまね まり)

愛知教育大学教授。研究分野は家族社会学。1991年大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程単位取得退学。主な著書は、『アジアの家族とジェンダー』(共編著、勁草書房)、『地域研究の課題と方法 実証編』(共著、文化書房博文社)、『ネットワークとしての家族』(共編著、ミネルヴァ書房)、『東アジアの家族・地域・エスニシティ』(共著、東信堂)など。